

自然主義的リバタリアニズムに望みはないのか

飯島浩之介(Hironosuke Iijima)
名古屋大学大学院情報科学研究科

自由意志と決定論の両立可能性問題は、伝統的に両立論・リバタリアニズム・ハード決定論という 3 つの立場を巡って論争が続いている。リバタリアニズムは、非両立論の一部であり、自由意志を肯定し決定論を否定する立場である。このリバタリアニズムの内部でも、大きく分けて 2 種類のヴァージョンが存在する。1 つは、チザムやオコナーに代表される「行為者因果リバタリアニズム」、もう 1 つはロバート・ケインによる量子論的なランダムネスに訴えるタイプのリバタリアニズムである。

さて、鈴木はケイン型の自由意志概念を「両立論的な」自由意志として認めてもよい」と述べる一方で「自然主義的なリバタリアニズム」というオプションに望みがない」と述べている(鈴木 2011)。私は、このような記述は、ある分類上の混乱によって生じていると考える。そしてその混乱は、両立論・非両立論という伝統的な分類が限界が来ているということに起因すると考える。この混乱に対して、私は 2 つの解決策を提案する。1 つは、両立可能性問題の意味を「自由意志と決定論の両立可能性」から「自由意志と唯物論(ないし物理主義)の両立可能性」へと修正すること。もう 1 つは、マニュエル・ヴァルガスが提起する修正主義を採用することである。これらによって、上記のような分類上の混乱を解決すると同時に、ケイン型のリバタリアニズムは望みがないどころか、むしろ非常にアクチュアルな問題であるという反論を試みる。

では、なぜ(伝統的な意味で)両立論者である私があえてケイン型のリバタリアニズムを擁護するのか。それは以下のような理由による。確かに非決定論がメカニズム決定論を論駁するかどうかは分からない(戸田山 2014)。しかし、非決定論が科学的なリアリティを獲得してしまった以上(ユニバーサル非決定論は真)、非決定論を自由の余地を増やしてくれるものではなく、むしろ決定論と同等かあるいはそれ以上に自由意志に対する脅威として検討する必要があると考えられる。例えば、現在の通説では、脳の意志決定プロセスに何らかの量子的メカニズムは関わっていないとか、ミクロレベルのランダムネスが何らかの仕方でマクロレベルまで保存されることはない(戸田山 2014)とされている。しかし、将来の科学の発展の結果、そのような通説が覆る可能性は十分にありえる。そのような場合に備えて、自然主義的リバタリアニズムという可能性を念のため担保しておくことは全くの無駄ではないと考えられる。以上のような理由により、あえてケイン的リバタリアニズムの擁護を試みる。

参考文献

- Kane, Robert ed. (2002) : The Oxford Handbook of Free Will, Oxford University Press
鈴木秀憲 (2011) : 「非決定と自由—ケインの自由意志論の批判的検討—」『科学哲学』 44 巻 2 号, pp. 47-63
戸田山和久 (2014) : 『哲学入門』 筑摩書房